

2014年度 福澤研究センター講座 『新解釈・福澤諭吉の実学』 第3～5回講義の趣旨とねらい

■1/31（土）第3回「家族も“学問”である—福澤の生きた家族」

慶應義塾福澤研究センター教授、副所長 西澤 直子

「一身独立」して「一家独立」し「一国独立」する。福澤諭吉が構想した近代を読み解くひとつの鍵は、「一家」であろう。彼は家族の形は文明とともに変化すると考えていた。

究極の理想として「自由愛情」を論じながらも、彼が同時代にふさわしいと考えていた「一家」の姿と、そこに内在した問題点を探り、現在私たちが直面している様々な家族問題の視点からも考えてみたい。

■2/21（土）第4回「自治と実学—福澤の地方自治思想」

中京大学法学部教授 石川 一三夫

偉大な思想というものは多面的な側面をもっており、含蓄と示唆に富むものである。日常的現象の中に問題を発見するのが抜群にうまかった福澤の思索のあとを、「実学」と「自治」という言葉にひきつけながら再構成し、新しい福澤像——自治思想の精髓——にせまってみよう。

参考文献、石川一三夫著『日本的自治の探究——名望家自治論の系譜——』（名古屋大学出版会、1995年初版）。

■3/21（土）第5回「幕末・維新期の“実学”思想—『学問のすゝめ』の視座」

慶應義塾大学経済学部教授、福澤研究センター所員 小室 正紀

「実学」についての福澤諭吉の画期的な考え方は、どのようにして生まれたのだろうか。一つは、欧米における学問のあり方に接し、その最も本質的なところを鋭く把握したことによる。しかし、福澤が、そのような鋭い理解ができたのは、それまでの江戸時代における学問の発達も影響していた。この講義では『学問のすゝめ』における福澤の「実学」についての考え方を示した上で、幕末維新の様々な思想と対比しながら、いかにしてそのような福澤の「実学」が形成されたかを考えてみたい。